

どんびま

2010年6月10日発行
発行者 椈の湖農業小学校

良寛さま

義母の米寿を記念して(祝うではなく)家内の妹夫婦と従兄弟たちで従兄弟の長兄の住む新潟へ旅行した。

楽しみにして行ったのは、佐渡に沈む夕陽と、良寛ゆかりの場所を訪ねることだった。

その一つ良寛祈念館は、生家のあった出雲崎の町並みと日本海を見下ろす高台にあって、館内に遺墨、遺品、文献などを



展示している。良寛は生涯、寺を持たず、一人で庵に住み、托鉢行脚の生活を続けた。村の子ども達を友とし、清貧に徹した禅僧であった。和歌をつくる歌人であり、漢詩を詠む詩人であり、すぐれた書道家でもあった。良寛体といわれる書は人柄を写している。

「花開くとき蝶来り、蝶来るとき花開く」という句がある。椈の湖農小は「蝶来るとき」にちゃんと「花開いて」いるのか？ 皆さんの顔を思い浮かべた旅だった。 (草)

6月授業日のご案内

- | | | | |
|-------|-------------|-------------|----------------------------|
| ●日程 | 6月27日(日) | | |
| 受付 | 9:00~9:30 | ●昼食 | ほうば寿司・吸い物・ほうば餅 |
| 始めの会 | 9:30~9:40 | ●服装 | 作業のできる服装 |
| 授業 | 9:40~12:00 | ●持ち物 | 手袋、タオル、長靴、雨具、食器、箸、野菜持ち帰り用袋 |
| | お茶摘み・お茶もみ | | |
| | ほうば寿司作り | | |
| 昼食 | 12:00~13:00 | ●締め切り | 6月22日(厳守) |
| 授業 | 13:00~15:00 | ●問い合わせ・緊急連絡 | TEL 0573-75-4417 |
| | 畑の仕事 | | |
| 終わりの会 | 15:00~15:15 | | 090-5110-9362(山内總太郎) |

お断り

6月26日(金)に予定しておりました「炭焼き」は都合により7月以降に延期です。

～5月の農小レポート～

「泥んこ田植えは楽しかったよ」

昨年の田植えは雨の中で大変な思いをしましたが、今年は好天に恵まれ楽しい田植えが出来ました。いつも農場長が云うようにお米を収穫するまでには、字の如く八十八回も手を掛けるといいます。

田植えはすでに何度か手間のかかっている一作業に過ぎませんが、はたしてどの辺りでしょうか？

1 午前の授業。 畑の作業、草取り、土寄せ。南瓜苗の植え付け、カボチャ苗は生徒さんがポットで育てたものに、名札を付けて植え付けましたが、苗作りに失敗した人はアボ兄から貰いました。南瓜は蔓性ですので誰のが何処に成り付くかは良く分かりません。それも楽しみのひとつかも？。

2 昼食。 草もち、おはぎ、筍とわらびの味噌汁、温サラダ、サラダ、天ぷら（桑の若葉、ヨモギ、コンフリー）、おにぎり。お餅の食べられない人向きにおにぎりが用意されましたが、お餅を食べた人にも大人気のようでした。

3 午後の授業。 田植え、田植えは天気が良かったので、とても順調に作業が進み、1時間くらいで終了しましたが、初体験の生徒の中には泥田に入るのに勇気がいったと聞きました。でも帰りは素足で楽しそうでしたので、良い経験になったことでしょう。

4 持ち帰り。 今年初めての持ち帰り野菜は、ほうれん草と小松菜でした。無農薬、有機栽培の野菜ですから、安心して食べてくださいね。

*バケツ稲用苗と土。事務局長の説明を守り、3～4本植えて立派な稲を育ててください。9月の授業日には持ち寄ってコンクールが有り、優秀な成績には賞品が用意されています。

*カブト虫の幼虫。各自2個の幼虫とエサとなる木の葉が配られました。農場長の話のように上手に育てて、7月のカブト虫運動会には良い成績を上げてください。こちらも成績のよい人には賞品が用意されていますからご期待くださいね。

～とくちゃんのちょっと一言～

「麦穂」今回ご希望の方には麦の穂を差し上げましたが、これは畑の一部を借りて11月に富田スタッフが蒔いてくれました。今では完熟まえの若い穂が生け花の材料として使われるようで、直売所等では良く見かけられます。一昔前までは麦は日本人の主食の一部であり、田んぼでは二毛作（1年に二作）の代表的な作物でしたが、食糧事情今昔の思いがいたします。

～あぼ兄の百姓ばなし～

「直売所から始まった野菜づくり」

5月23日、ようやくキュウリの収穫ができた。早速一本いただいた。丸かじりのキュウリは甘さと香りがひろがって、栽培者ならではの幸せを感じる。

今年の初もぎは例年と比べると20日は遅い。キュウリたちは低温に耐えるために、節間が短く葉は小さくて内側に巻き込んでいる。気象庁が発表した今春（3～5月）の天候まとめによると、平年に比べて降水量は多く、日照時間は短く、寒暖の差が大きく、平均気温は全国で平年を下回った記録的な天候不順であったという。キュウリにとっても大変な年だったのだ。

キュウリはあぼ兄が百姓をやり始めた頃、飯田市の仲間に指導を受けて作り始めた。春は3月ごろから雨よけハウスで300本位を、夏は7～800本位を作って、直売所や近くの市場に出荷している。

中津川から下呂に通じる国道257号線沿いの空き地に自分で石を積み丸太小屋を建てて、まさに手づくりの無人販売所を始めたのが30年前のことになる。無人販売の一番の問題は代金の回収である。1袋100円のものに1円玉が入るようになり、社会道徳上これではいけないと、近所のおばさんを店番に頼んで再出発をした。

さらに違う場所に「福岡農家直売所」を立ち上げてから今年で25年になる。今ではあちこちに行政主導の道の駅や農協などの団体営の大型化した直売所ができていますが、当時では先進的な取り組みで注目された。

直売所は朝採れた野菜を自分で値をつけて売る。直売所は野菜づくり(農家)の手段でありやりがいでもある。消費者の方に喜んでいただく、お金をいただくと同時にいろいろな情報をいただき、新しい出会いが始まる。お客さんもおばさんたちとの会話の中で、野菜の作り方・食べ方、漬物の漬け方などを習い、おばさんたちの長年の知恵と実績が喜ばれるのだ。農村からの文化・情報の発信基地でもある。

車の流れが変わって、事情も変わった。松本から高山に通じる安房トンネルの開通で、中津川インターから飛騨に向かう関東方面からの客が激減した。また、東海北陸自動車道の飛騨までの開通で中部圏・関西圏のお客も目に見えて少なくなった。国道257号線では一番早くからやっていたことなど通用しなくなった。

「福岡農家直売所」は現在も同じ場所、JAひがしみの下野支店の駐車場の一角で営業している。4月から12月まで無休でやっている。あぼ兄も一日も休まずに出荷しているし、朝9時までは運営の責任上毎日いる。

場所は、冬の課外授業の会場「下野いきいき会館」の近くだから、一度寄ってもらえると嬉しい。有料だった「城山大橋」が昨年無料化となり、中津川インターまで20分、恵那インターまでは25分、下呂温泉までは約40分で行ける。農小の帰りにも、もう一つの楽しみ方ができると思う。

野菜づくり(農家)も高齢化などで減ってしまって、夕方近くには品切れもあるが、あぼ兄の写真が「いつも みなさんをお待ちしていまぁす。」